

英代世書談 三



本朝世事談綺卷之三目錄

○態藝門

香道 神田香 式三番 狂言 小鼓 家研 家雕 碁

蹴鞠 誠 申樂 巨 正 奈 象 戲

加茂香 能 勸進能 笛 太鼓 宗 橫谷 雙六

揚弓
井上節
諸喬節
土佐節
河東節
古今節
勘三郎芝居
獨藝
おやま

淨福燭
後太夫節
肥前節
永田節
隆連節
男衆
竹之屋芝居
人形遣
出づる

加太夫節
淨雲節
外記節
半太夫節
道念節
歌舞妓
勘三郎芝居
野郎間
淨福燭作者

本朝世事談綺卷之三



態藝

○香道

東山慈眼院殿にて香角の法をまゐる作は名香正しく
をたふしつゝ優劣をわきまを名香合ふゝ其不
十柱香競馬。紙川。源氏。吳越。ホを施。凡六十二箇の法
あり。滑下。祐信の香。連理香。瑞香。田舎香。内。三福
十種名香。東大寺。法隆寺。道遠。二。香。節。柏。香
法華經。紅塵。八指。中。作。三。香。節。あし

菊岡沾涼述

所介遊か六條のふき又平福のふき又七十のふき
 百六十のふき又平福のふき又七十のふき
 虎園異制庭訓 云天平年中而海國より好ま
 を貢献せしとあり又朱雀院朝閑院天皇の御方仁仁
 此義和百歩香を合香の一本を奉る
 事か一應水のころ京極入道養一を好て
 軍藏國幣のいふ海をたのめり又龜のころ
 香乃の隠とふ 相河保 宗信 志野三島庵門尉
 行二二階堂 長秀 松田丹後守 龜直 肥山戸京
 元種 内長太藏 祐憲 志野三島 盛卿 肥山戸京
 宵和 長房 志野三島 又法子相河保
 志野院の二派あり

○蹴鞠

用明天皇の御時 蹴鞠 天智天皇の御時
 中臣鎌子 法皇の御時 蹴鞠の事あり
 事日本紀より七十七代後河内院より二神
 ありはる時大細成道と好むありてある二神
 常よりふきししそのら蹴鞠の事あり
 雅經の蹴鞠をけりあり今も至る蹴鞠の事あり
 十代後高麗院より長丁の蹴鞠の事あり
 後醍醐院後深草院より蹴鞠の事あり
 一より女子蹴鞠 蹴鞠の事あり
 蹴鞠の事あり

外郎流

洛陽西門院陣外郎二位杏林鞠に日録て

秘の曲を聴くうその子不親御海光父の傳を傳
 うその子の世に人あつてを傳ふか家産の始なり
 當時所家の流儀をその家産に傳ふなりとて傳を
 用ひしうし順年世に下めてよきうびい京義家なる
 ち海産を傳ふ後友助の義家清き流傳所の傳を傳
 大坂基なる後甚入し戸傳を傳ふなり傳を傳ふ
 可真家光清き流傳し其かをうかふなり傳を
 傳ふなりとて多うなりとて傳を傳ふなりとて傳を傳ふなり

○賀茂書

今新編なる流傳賀茂書なり傳ふなりはあり傳の
 傳に傳ふなり云ふなり非し上古の流傳なり裸足或の
 傳を用ひし草流傳なり流傳なり傳ふなりとて傳を傳ふなり

けりて用ひし流傳なりとて傳ふなりはあり傳の傳
 松下部部の流傳の傳ありて傳ふなりとて傳を傳ふなり
 けりて傳ふなりとて傳ふなりとて傳ふなりとて傳を傳ふなり

○神田書

雲光清の流傳の空より流傳を丹傳し又流傳
 形も異なり光清の神田に居るなりとて傳ふなり
 近世の妙足なりとて傳ふなりとて傳ふなりとて傳を傳ふなり
 うりて傳ふなりとて傳ふなりとて傳ふなりとて傳を傳ふなり
 うりて傳ふなりとて傳ふなりとて傳ふなりとて傳を傳ふなり
 うりて傳ふなりとて傳ふなりとて傳ふなりとて傳を傳ふなり
 うりて傳ふなりとて傳ふなりとて傳ふなりとて傳を傳ふなり

○調

東の流傳なりとて傳ふなりとて傳ふなりとて傳を傳ふなり
 東の流傳なりとて傳ふなりとて傳ふなりとて傳を傳ふなり

親世世作五十一番

名目アリ

又六十一書あり

親皇小治帝年二千壽
日治帝年二千壽

今春善作仙十八

今春子晉隱

書
主
增
刊

十番
三系面及所作書の作れ又作書高き

もあつた。想合^{そうご}の石^{いし}辛^{から}二番^{にばん}あつた。月^{つき}をわ^わつた。集^{あつ}まふ。

大德本作者事依金東史願陽下

進々親世深希長懷速々正徳の時

物部中板下河安山以上板の耳合ふ也

于時方盛年甲申孟夏上浣

吉田義人無將不

漢の事 宋臣土產の事

今更に
 此の
 事も
 大幸

のちあるものなり。佛經のそとにたゞい何と

よんあふなう松の下の海へ新くお新所へ

[illegible]

春の龍神
大正の世

乃作
 以竹
 和
 乃作

やまゝせうりつと紙よ 我れ一人して云をなす
も珍なり又時風といふは時風なりけり春
神武天皇御宇の補佐の臣し澤をなす
わ頼朝義経といふは頼朝義経といふは
陽梅といふは文育といふは
何れもていつてもなれ事いあるは
地の所も世の所をなすといふは
秀の苗字のやいなる

○能

東の殿の時紙よ 何れも
あををいひ親を奉る下
を樂に令てい枝をなすといふは
能い神をなすといふは

たもものなりと云ふは
これを神事能と云ふは
太神宮より和座
日吉より心陽下坂
賀茂住吉より新座
春日より外山室結新座
け春日の四座は
いびくめされし
所田より経石に
乃座し故に服部と
喜多の指陽群像云
乃座父の醫所形慶
今春の秦氏廿九
乃座父の醫所形慶
乃座父の醫所形慶

尚澤事多し多いて臨幸の妙を傳へ長祿ハ

式三番 翁ハ天照太神 千歳ハ八幡大神 鈴太夫

三番 豊ハ春日神ト 杉ト 楓ト 多羅尼ト

神道ハ之を報へしとて佛教ハ之を以て

脇師 進友福王春友高安室主ト 之の家あり

申樂 翰林蒲葉集云奏下 膳ハ何ある推古帝

の朝 戸室子天神也 祇を祭祀 安國の政を

ふりて 太平の曲を以て 傳へ 命ト 紫宸殿の

ふりて 大儀の枝をさし 太子ハ神樂の神ハ

ふりて 申樂ト云 詠文 申も又神ト云 王

大歳神 申のふりある時ハ 神樂を祭り 之を以て

神樂ト云 神樂ト云 げも 一ハ 戲をなす 御優

とて 宇治拾遺云 内侍所ハ 神樂の役職ト云

めして 今ハ 申樂ト云 申樂ト云 申樂ト云

源氏ハ 女ハ 之を以て 申樂ト云 申樂ト云

勸進能

後 弘安正又 申 申 申 申 申 申 申 申 申 申

勸進能 申 申 申 申 申 申 申 申 申 申

法印 千時九十八 申 申 申 申 申 申 申 申 申 申

千時 千時 申 申 申 申 申 申 申 申 申 申

是 勸進能 申 申 申 申 申 申 申 申 申 申

初月 申 申 申 申 申 申 申 申 申 申

二月 申 申 申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申 申 申

申 申 申 申 申 申 申 申 申 申

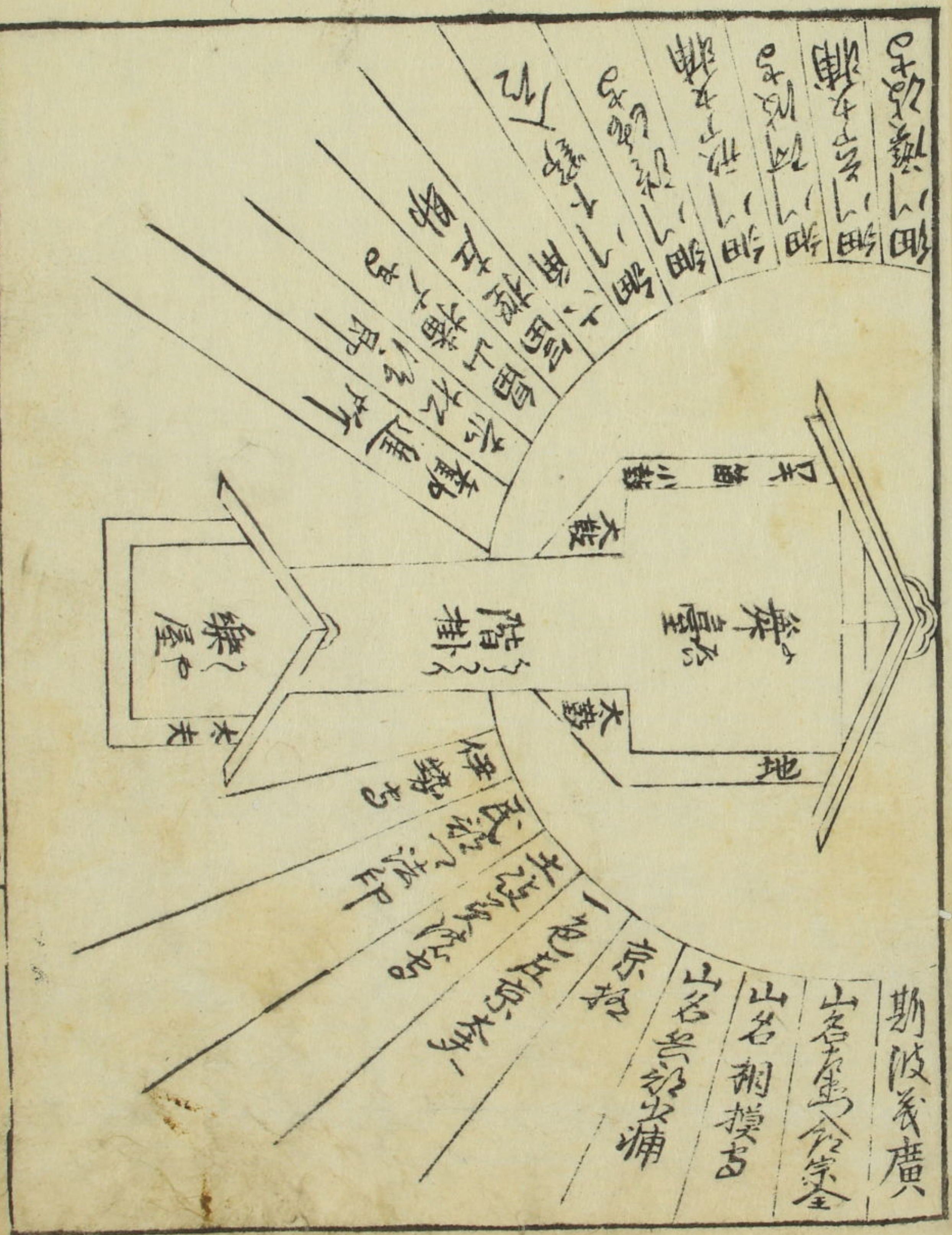
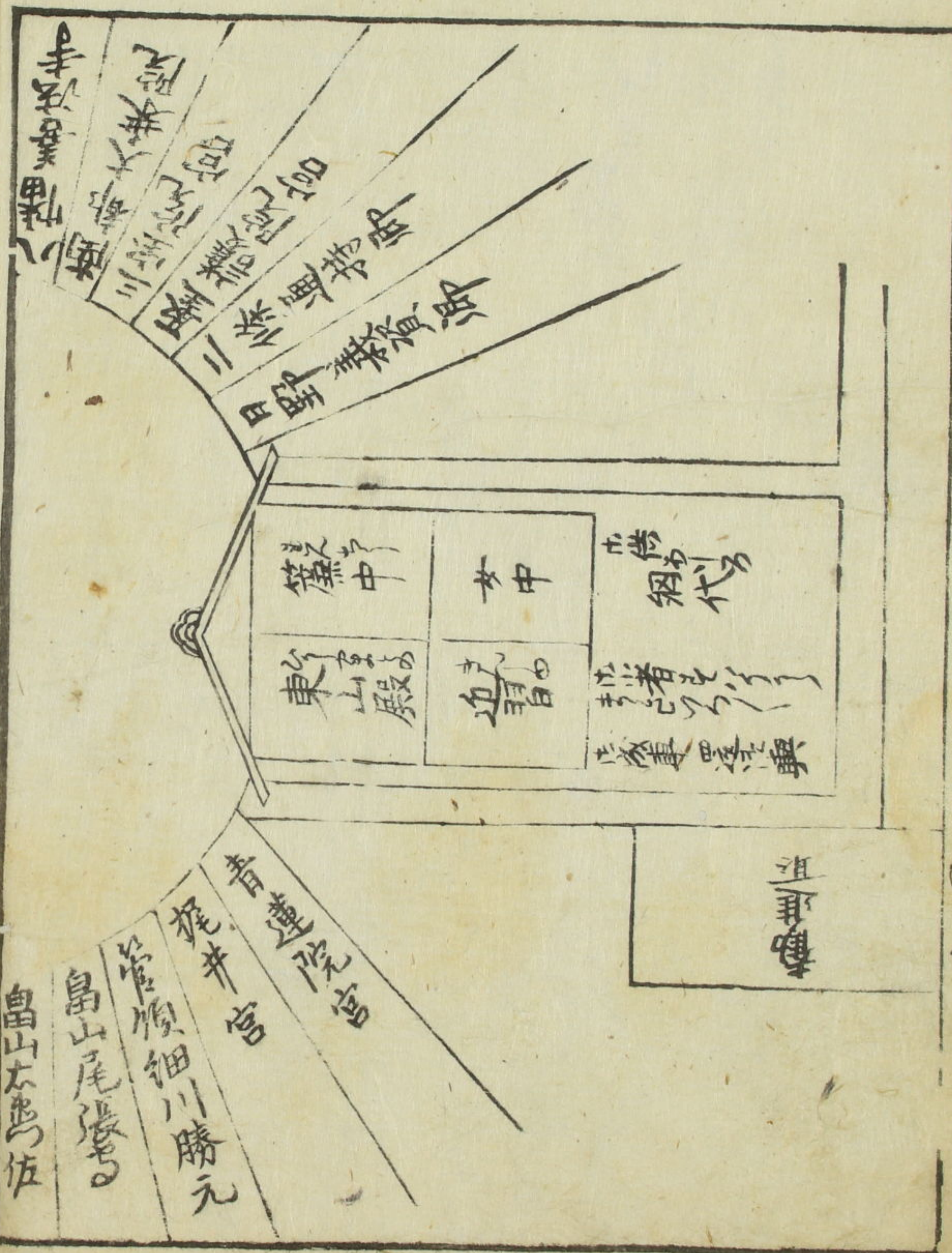
三日 沖一献 還 斯波治女捕義廣宅へ
細川留之助使客一百足様より招く相付を夜更
御下より
御下より 湯有衣より 事なり 等の例

相生 初日 四月五日
ハ傷 みるまの暮
三井寺 かんこ
耶 足ら
源氏佐頼 くら
丹後物狂 八幡のま
猪飼

二日
猪羽 びけふそ
教盛 うさ
春道 大う小
松尾 いもの
月夜居士 志一や
恋のあもみ

三日
向楽天 二本柳
柳公村 小より
紫王馬我 あこい
二人静 くら
口法女お くら
碓 入る
まきみえ くら
杜若 くら
夜下僧 くら
市乞能 養老風

二日月の娘の縁の
大世展あり 慈照院
将士をぬく 山つり
あり 将士は中へ
時節は ぬく
猪糸のいへ ぬく
老より ぬく
あり ぬく
成金 ぬく
機敷 ぬく
あり ぬく
か ぬく



○ 狂言

能く何とくはする高官が家へ行く
 早後の事ある一々なる能く俳優よきよ
 せ下のありさゆをうーめつたためあると
 何うせればおーく狂人の言葉のさくあり
 とかくとありう 流 大藏流の二流あり
 叱 噓 堀 鑑 云大藏某狂言のあつてを
 堀家を起さう 永徳年中家列堀南の屋
 少梅寺とあり堀に耕す菴の住僧を仙流
 二王流の堀の神を信一毎日の法能
 抱くある時やろの意を二足の狐を渡り
 抱く解く世尊といはれぬふる霊ありて

藏主は流ひうつ人賊を逃難を流さ未だ
 乃を流さるは狐の子孫今も寺内へ住といふ
 大藏は事と狂言は根に叱噓と解一又狐
 ととては彼狐の事を感一老翁と化して
 大藏氏に狂言をうーく視て其能を移す
 一 狂野狐の示作してもの肯能を流さ
 といはせしめ忽然として去るよう大藏
 妙を流て現狂言といふ家の大事とて通
 達しぬれしう奇特もありさるといふ

○ 笛

能 笛 子 四 流 あり 所謂 一 曾 流 森 田 流 庄 流
 春日 流 潮 流 尾 州 家 二 等 中 村 一 曾 一 子

その宗乗より代つて彫工の妙なる法家
狩野古法眼の居るお通く文をいへん
まづ古法眼をして其板紙畫しめお通を模して
彫く事朝古今に巧なり

祐乗 後藤四郎兵衛 彫工ノ祖
義教公ニ仕ユ 生國美濃 実名ヲ以法名トス

永正九年五月七日卒 歳七十八

宗乗 四郎兵衛 七十歳卒 乘真 四郎兵衛吉久
永禄五年二月六日卒 五十八歳

尊乗 孫絶 長乗 七郎兵衛

光乗 四郎兵衛光家 元和六年九十二 德乗 四郎兵衛 寛永八年孟
大正九 秀吉公賜食邑

元乗 孫絶 長乗 七郎兵衛

栄乗 四郎兵衛正光 元和三年四月卒 四十三

顯乗 理兵衛正綱 寛文三年正月卒 七十八 今後藤家
此裔ナリ

○奈良彫

宗貞 元々奈良氏のワケも塗師のかき天姓
彫工は妙を得たり

奈良利宗 小左衛門入道宗貞

利治 四郎兵衛入道宗有 弟子 辰政 忠左衛門

利永 七郎左衛門 弟子 安親 弥五八入道東雨

宗利 小左衛門 現

現利光 七郎左衛門

○横谷彫

大學柄

横谷宗與よりある宗子宗師の末の後の子し
寛文のころ東武より彫工を連一一流を記したる頃
成堂宗子宗師に彫せし持主戒時大寺に置かれ
即ち小柄を仰せしものたる出を彫りし
所より入る五石宗の小柄を仰せし金
一牧を賜ふ五石宗の彫工より五石宗の
所音物あるに近習の徒士一柄屏風なるものあり
り世より大寺の柄を彫りしものなり
宗子宗師の彫工より其子宗師の宗子
父子の彫るもの英一傑の繪を換へ奇妙を彫て
隱年世より寺の彫工より其子宗子又善に現在

○基

本朝の古備大臣にけりする物語云堯造圖基以
教子丹朱古備の唐よりある事二十一年して天
年より本朝あり唐よりある事二十一年して天
續日本紀より云大伴宿禰子忠と中良文と連東人
政事の隙に圍基事あり憤罵して子忠の東人
を教に持統帝の柄に基雙六を模せし
なり中世後帝の院の柄に意雲老人の彫り
そのら後醍醐天皇の朝に寂光寺本國の彫
天下の巧もの代に本國の彫りしものなり
道策の古今の彫りしものなり
基經云王積新より音龍基經九部を吐くことを授く

○象戲

天正の頃京都宗桂の字宗古あつた好む
 信長云の事とて宗桂象戲を神と信長云法
 照あつて日中車法を遊ぶものし友人宜
 事をも習ひ初めきよの病をうへとていふ高名を
 わるゝ宗桂とて桂馬の號をも義に仰り
 寓兵於局藝之中謂天下雖安不忘戰
 之戲也爾來有將士步卒車馬弩砲之
 象有藏機隱知二龍出海雙馬飲泉之
 勢あつて信長云の事とて附合せり度長の頃宗桂
 宗古とて出され実永の頃没するあつてしむと
 を神と宗桂象戲圖式を作る其の宗古述く

象戲は周武帝を造其臣王褒を以て宋の
 司馬遷云象戲の圖法を仰り王褒君臣を
 得しといふと本邦のぬきとるなりとて

○雙六

漢武帝天監年中日本（とて本邦）十六代武烈帝に
 一二の月にはけりわに四五六八ありとてその
 つもくを云ぬとの事とて今その所をさしゆ
 かんておつてにさかたといふきといふもの
 すけぬとて棄てて其のをへるなりとて一むなりとて
 まくまのつていふとて

○揚弓

元宗楊貴妃にけりまゝなりとて揚弓といふ

古来の楊もてらを出るものなりと今も極方
 を以て本邦より古堂上のまゝ官家の現
 七ツより中一よりとし弓長二尺八寸八分
 裏彈九分九曜 本彈二分七厘二星を
 矢長九寸九曜 今尺一云 的 不 落 あり 法 あり
 諸段一表矢負二百本 中一五十本以上朱言
 百本以上の泥書 而本邦以上金貝八十以上大令員云
 追新に中一に中一はたを清く一表二百本のく
 的の中一よりとし弓長二尺八寸八分を編入え縁の
 芝の五郎 未願と云お人の悉くのとあつて而中
 五の金貝 中一に諸段の看板あり 一とあつて
 一と願年 而中一五の金貝のく 而中一五の金貝ハ七ハ

あつて 芝の五郎 未願と云お人の悉くのとあつて而中
 五の金貝 中一に諸段の看板あり 一とあつて
 一と願年 而中一五の金貝のく 而中一五の金貝ハ七ハ

○淨瑠璃

信長公の侍女小野お通の美才の女し後、美才公の
 御中より一表列矢作淨瑠璃女事を代へる所
 の御陽之の源十二神をより十二段と淨瑠璃の
 一と一平家お通の信長公の御中より一表列矢作淨瑠璃女事を代へる所
 一と一平家お通の信長公の御中より一表列矢作淨瑠璃女事を代へる所

江戸諸藩

肥前守より丹波守子なり

江戸肥前

長門守より子なり

江戸外記

下り守より二代目より守なり

江戸佐佐

虎より守より二代目より守なり

江戸永閑

源より守なり

江戸半平

知事より守より不修養者何限とや

江戸しげ

肥前守より守より入後一流をこり

江戸又

又肥前守と云ふのは守より守より

江戸守

守より守より守より守より

江戸小

小田守より守より守より

江戸守

守より守より守より守より

江戸守

守より守より守より守より

薩摩浄雲

次郎右衛門入道

子

薩广太夫

次郎右衛門

大薩广

次郎右衛門

丹後太夫

外記太夫

下り守

式部太夫

長門太夫

土佐太夫

虎之助子

土佐太夫

丹波太夫

近江太夫

語斎

手品市左門

源太夫

虎屋

肥前太夫

半太夫

半之助

大源太夫

治云清後

小源太夫

竹之助

永閑太夫

金右門

和泉太夫

河東

子となりて

子なり

陸連郎

深き自蓮宗の信し衆別堀顯本寺の深ゆ
 僧々々々ありて還俗一六飯業好むる二氏の
 家に入々子商人となれり常々曲をぬく小歌の
 一派をくくむ出をその唱雅やうく人のをやりげ
 教にすなりうり母は深き師と稱す

○道令節

市子^{いちこ} 乃^{すなはち}確^{たしか}と云^{いふ}をうへび出^でしり此^{この}帝^{てい}躍^{えつ}の振^{ふる}子^こ
よく合^ある間^{かん}なれども今^{いま}は道をうへに

古
今
節

え禄のころ古今勢を造ると云芝居をうへむ始に

男 糸

白栢子半

後をね院の所へ通憲入るゝ法義堪能の今第采
 をやりて破の前司とらふ女子第をぢくゆれ子
 主をね一太刀を常て第一ゆふ男第とらふ
 破の前司の生國渡大内郡小破と云ふの者もの靜然ア
 第靜然と云ふげふのせれし而後娘靜と云ふ
 後太刀を常てありてを白拍子と云ふそれより代へ
 白拍子と云ふし今第子さいこ静子しづこと云ふあり
 比と

歌
采
妓

羅山らさん子日慶にんきょう長十九年じゅうくじゅうねん乙卯えのう元もと一いち僧衣そういを志し証しやうを
乃なと佛号ぶつごうにをつをて念ねん佛ぶつ確かくとしてし安あん長ちやう

江戸小平太と云ふものゝ人、雖山文集云鼓吹、
然あつて本偶の動、意下て曲節あり且、
採芝を、板を踏く、若と本偶とおぼし、
幸死生あり、今日の、若、乃偃作、
小平太と号、近世の偶、巧、
野郎間、江戸、
もの、
常をの、
いか、
い、
おやま、

花柳の、
出つ、
つ、
か、
を、
候、
か、
大坂、
○、
は、
あ、

世に作るもの多し。然るに、
 一、何れも人知るものにして、
 言、物、不、思、成、を、綴、る、元、日、所、の、如、く、
 あり。その、流、なり。え、孫、の、け、り、
 之、居、狂、言、の、作、者、なり。之、
 作、者、は、世、俗、作、者、の、如、く、
 享、保、九、乃、中、一、十、有、余、
 書、て、之、の、類、を、
 之、後、世、に、去、り、
 之、の、作、者、は、
 之、の、流、なり。

三之巻軸

金五丹

高橋俊興

